支店長の わがまち紹介 第93回

美しい思川桜並木

小山市

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆様との密接な繋がりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。

今回は栃木県小山市です。小山支店長が小山市長 浅野正富氏にお話を伺いました。

小山市の魅力や特徴、今後の展望についてお聞かせください。（取材日：令和3年1月28日）

■ 農業、商業、工業のバランスがとれたまち

小山市は栃木県の南部、茨城県結城市の西側に位置し、人口は約16万7千人です。東京圏からは約60kmで、JR小山駅から東北新幹線を利用すると、約45分で東京駅に到着します。

市内にはJR宇都宮線や水戸線、両毛線などの在来線をはじめ、国道4号や国道50号などの幹線道路が東西南北に交差しており、本市は交通の要衝として栄えています。

また、市街地周辺では、農地や平地林などの田園環境が四季を通して美しい姿を見せ、市の中心部、JR小山駅から徒歩10分の場所には、関東地方で一番早く鮎釣り解禁を迎える清流「思川」が流れるほか、市の南部には、平成24年にラムサール条約湿地に登録された渡良瀬遊水地が広がっています。

本市は交通網を発達させながらも、素晴らしい自然環境が保全されたことで、農業、商業、工業のバランスが非常に良好に保たれています。

■ 小山市原産の桜「思川（おもいがわ）桜」と植樹事業

小山市の花「思川桜」は、小山市原産の桜です。昭和29年、東京大学大学院理学系研究科附属植物園の元主任で、故久保田秀夫先生が、思川のほとりの修道院の庭先で春と秋に二度咲く「十月桜」の種を育てた際、突然の変異から誕生しました。

花弁は10片ほどの半八重咲きで、ソメイヨシノと八重桜が咲く中間の時期に淡い紅色の可憐な花が咲きます。修道院のそばを流れる清流・思川のイメージから「思川桜」と名付けられ、学会でも発表されました。

思川桜

思川桜は、20年ほど前から取り組んでいる「桜の里親制度」によって植樹が進められ、今では思川沿いをはじめ、市内各所で楽しむことができます。筑波銀行小山支店の黒田支店長をはじめ、多くの方に植樹していただいており、嬉しく思っています。

■ 東日本初「野生コウノトリ」のヒナ誕生

小山市を含む4市2町に跨る渡良瀬遊水地は、日本一大きな遊水地です。広さ約3,300haのうち、約1,500haに広大なヨシ原が広がっています。

渡良瀬遊水地

渡良瀬遊水地には絶滅危惧種183種を含む貴重な動植物が生息・生育するほか、特別天然記念物のコウノトリが定着しており、まさに「自然の宝庫」です。

昨年、遊水地に定着していたコウノトリのオス「ひかる」とメス「歌」に、可愛いヒナが誕生しました。昭和46年に国内で野生のコウノトリが絶滅して以来、東日本で初めての野外繁殖となりました。

本市は、この喜ばしい出来事を記念に残すため、郵便局との連携によりオリジナル切手を販売し、大きな話題となりました。

２羽のヒナは、渡良瀬遊水地にちなんでオスが「わたる」、メスが「ゆう」と名付けられ、巣立った後も元気な姿が確認されています。

誕生した２羽のコウノトリ「わたる」（左）と「ゆう」（右）

小山市長
浅野 正富氏

筑波銀行小山支店
支店長 黒田 健一

※撮影のためマスクを外しています。

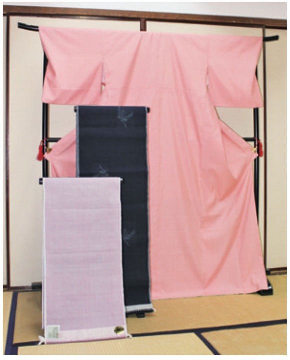
■「本場結城紬」を未来へつなぐために

本市の伝統産業の１つ「結城紬」は、市の東部、鬼怒川に面した地域を中心に生産されています。平成22年11月に「ユネスコ無形文化遺産」に登録され、昨年、登録10周年を迎えました。

すべての製作工程を手作業で行う「本場結城紬」は、世界に誇る絹織物として知られています。軽やかで柔らかな風合いが魅力で、一度着れば、手放せなくなる一品です。

しかし、原材料である真綿の生産者の減少や手つむぎ糸を製作する技術者の後継者不足が深刻化しており、世界が認めた本場結城紬の手わざをどのように未来へつないでいくかが課題です。

そこで本市は、本場結城紬の振興策として、2人の紬織士を市職員として採用したほか、JR小山駅前にある「おやま本場結城紬クラフト館」や「桑・蚕・繭・真綿かけ・糸つむぎのさと」を活用し、真綿かけや糸つむぎの講習会を実施しています。使用する繭の多くは市内の養蚕農家6軒が生産したものです。



本場結城紬

今後も生産者や技術者の方々との対話、そして、同じ結城紬の産地である茨城県結城市との連携を大切にしながら、世界に誇る「本場結城紬」の伝統を未来につないでいきたいと考えています。

■ 徹底した意見のキャッチボール

「市政は誰のためにあるのか」と考えれば、当然「市民のため」です。この大前提である「市民のため」の市政運営を続けていくには、徹底した市民との対話と連携が必要です。

約16万7千人が暮らす小山市

私は常に、市民の皆さまからの声を愚直に聴き、市民の皆さまが求める政策や事業を実現させることを最終目標として市政運営を行っています。

そのための代表的な施策として、市民の皆さまと意見交換を行う「市民フォーラム」を実施いたします。また、「市長へのメール・手紙」という制度でも随時意見を受け付けており、市民の皆さまからいただいたご意見は、一つひとつ丁寧に目を通しています。

しかし、市民の皆さまからいただいた具体的かつ貴重なご意見を短時間のうちに政策や事業に反映していくことは容易なことではありません。

そこで私は、市民の皆さまからいただいたご意見が、現在、どのようなプロセスにあるのか、可能な限り説明する「意見のキャッチボール」が大切だと考えています。

■「市民が主人公」のまちを目指して

市民の皆さまとの対話や議論を重ね、共通認識を増やす市政を進めることは、私たち一人ひとりが「自分にとって何が大切なのか」ということを真剣に考える機会が増えることにつながります。

これまでは、「時が経つにつれて社会全体が右肩上がりで成長し、誰もが収入が増え、様々な問題が自然と解決していく」、そんな想像が可能な時代でした。

しかし、これからの時代は、右肩上がりの成長は望めません。そんな時代だからこそ、市民の皆さまが「こういうものを大切にしたい」と意見を出し合うことで、「小山市にとって本当に大切なこと」が自ずと見えてくると考えています。

私は長年、環境問題に関わってきた経験から、市街地周辺に農地や自然がバランスよく広がる「田園環境都市」という考え方に、小山市のまちづくりのベースになるヒントがあると考えています。

「自然に囲まれながら、ゆとりのある生活ができる」という幸せが感じられる環境こそ、小山市が持っている魅力なのです。

私は市民の皆さまと一緒に、「どこかにある何か」を求めるのではなく、「今、足元に広がるものをきちんと見つめていく暮らし」を大切にできるまちづくりを進めたいと考えています。

そして、この考え方は「持続可能な都市」の実現につながっていくと思います。今後、小山市が「田園環境都市」のモデル都市として成長していくことで、市民の皆さまが、小山市に対してさらに強い誇りを持つことができると考えています。

また、今春、小山市役所の新庁舎が完成予定です。この新庁舎が「市民が主人公」である小山市のシンボルとして親しまれる存在となることを願いつつ、今後とも市民の皆さまと手を携え、小山市の魅力を最大限に引き出す施策を推進して参ります。

今春完成予定の新庁舎

■ 筑波銀行への期待「コロナ禍での厚い支援を」

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、国による緊急事態宣言も発令されました。全ての方々が大変な思いをされていますが、特に飲食業やその周辺産業、中小企業の皆さまが非常に大変な状況に追い込まれています。

社会を人間の体に例えると、お金は血液に置き換えることができます。コロナ禍では、社会という体に血液が流れにくくなっている状態が続いています。

市としても可能な限り支援ができるよう努めて参りますが、筑波銀行におかれましても、地域社会のためにご協力くださいますようお願い致します。

写真提供：小山市